前期：キリスト教思想と宗教哲学

オリエンテーション――宗教哲学とその基本問題

１．宗教哲学の歴史と伝統　２．理性と啓示　３．悪と神義論　（４．予定と自由意志）

５．形而上学と神

６．シュライアマハー　７．トレルチ　８．波多野精一　９．ブーバー

１０．ティリッヒ　１１．リクール

１２．研究発表１（山田、田中）　7/3

１３．研究発表２（岡田、長原）　7/10

１４．研究発表３（張、谷塚）　7/17

１５．研究発表４（齋藤）　7/24

＜前回＞ティリッヒ

（１）ティリッヒ思想とその射程

１．ティリッヒ(1886-1965)

神学と哲学の境界（神学者・哲学者)、宗教社会主義、文化の神学、宗教史の神学

ドイツからアメリカへ　→　現代キリスト教思想は理論と実践の両面で変革を必要としている。

２．思想の発展史：初期（第一次世界大戦）／前期（1919-1933）：意味の形而上学

／中期(1933-第二次世界大戦)／後期(1946-1960)：存在論

／晩年(1960-1963)

３．一貫性と変化（思想の諸レベルにおける議論)：弁証神学・宗教哲学、象徴論

（２）前期ティリッヒの宗教哲学

４．19 世紀から 20 世紀の哲学の展開＋弁証法神学

５．西谷啓治「宗教哲学――研究入門」(1949)（『西谷啓治著作集　第六巻』創文社）

６．Religionsphilosophie(1925), in: MW.4

７．Kairos und Logos: Eine Untersuchung zur Metaphysik der Erkenntnis (1926), in: MW.1

0)問題：歴史主義を克服する真理の動的理解

1)西洋思想史の二つの流れ：

主流（方法論的流れ、合理的学の理念・形式主義）と傍流（神秘主義、生の哲学）

2)真理は超時間的・超歴史的。抽象的な真理概念　→　カイロスへのアスケーゼ

3)認識の歴史性・決断→存在の歴史性・決断

（実在論：認識の合理性は対象の側から規定される。）

歴史主義的な相対主義への回答は、真理自体の歴史性において可能になる。

「ロゴスは時間のなかにはいってきて、その内的無限性を啓示するのである。」

ロゴスはカイロス的である。

4）ヨハネ福音書のロゴス論（受肉）→ドイツ観念論・後期シェリング

→後期ハイデッガーの真理論・存在論

5）絶対者自体が動的歴史的である。

cf.　・形而上学的な神＝神の不可受苦性

・弱い神、あるいはプロセス神学

↓　弱い神の方が、より高い。

「相関の方法」という語り方：カイロス→状況、ロゴス→メッセージ。

８．西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」(1946)

（３）ティリッヒ神学の方法と体系

９．ティリッヒ組織神学構想：

「相関の方法」(Method of Correlation)によって構成される体系の横軸（横構造）

＋　三位一体論的あるいは救済論的な体系の縦軸（縦構造）

10. 神学の解釈学的構造

1)「相関の構造」:「問いと答え」の相関＝解釈学的構造、自己同一性と状況適応性

・問いの定式化（哲学）←状況

・メッセージの答えとしての提示・解釈（神学）

2)「個と共同体」の循環：共同体における問答・討論・対話の個人による集約

11.「問いと答え」の定式化における哲学（あるいは哲学的要素）の役割

問いと答えは自律性を保ちつつも、相互に依存し合っている（＝循環）。

１１．リクール

（１）リクール（Paul Ricoeur, 1913-2005）とその思想展開

・熱心なプロテスタント（改革派）の家庭に生まれる。父は第一世界大戦で戦死（1915年）。

・レンヌ大学を経て、1934-35 年はパリ・ソルボンヌ大学で学ぶ。

・第二次大戦に出征（1939 年）、捕虜としてポーランドの捕虜収容所で数年間拘留。ヤスパースを読む。

・CNRS を経てストラスブール大学（1948-1956 年）。

・M.デュフレンヌと共著でヤスパースについての研究書を出版。

・1950 年、『意志的なものと非意志的なもの』（Le Volontaire et l'Involontaire）を主論文、フッサール『イデーン I』の仏訳を副論文として、国家博士号を取得。

・1956 年、パリ大学（Sorbonne）の哲学教授。

・1960 年『過ちやすき人間』『悪の象徴系』。

・1965 年『解釈について--フロイト試論』出版。

・1968 年 5 月革命の際にはパリ大学ナンテール校学長（1965-1970）として同大学学生との折衝役。

・1973 年からシカゴ大学（1970-1985）神学部教授を併任。英米の言語哲学との相互影響が顕著になる。また宗教学者エリアーデと交友。

・1975 年『生きた隠喩』。

・1981-83 年主著『時間と物語』。

・1992 年『他者のような自己自身』（「物語的自己同一性」（identite narrative）の概念を提示）。

・2000 年『記憶、歴史、忘却』出版、デリダとの間で「赦し」（pardon）の観念をめぐって議論。同年京都賞受賞。

・2005 年に自宅にて老衰のため死去。92 歳。

↓

・哲学者とキリスト者

・実存、悪、神話、象徴、精神分析

言語、隠喩、テキスト、解釈学、物語、歴史

自己　　愛　正義　赦し

現象学　　構造主義　　分析哲学・存在論

神学　聖書　　死　復活

（２）死

『死ぬまで生き生きと』: 死と復活のテーマ化。

思想的には哲学という領域にとどまりつつも､キリスト教信仰にコミットして生きる。

→　哲学と神学・宗教との関係性という問題領域には十分に踏み込まない。キリスト教信仰という点では、むしろ素朴な問題設定にとどまっている。

cf. ティリッヒ

断章１

「「連続した選びによって、偶然が運命に代わった」――それが私のキリスト教。」(96)

「私は生まれながらと、遺産とによって、こうなっている。私はそれを引き受ける。私は改革派の伝統のキリスト教信仰のうちに産まれ、育った。」(96-97)

「[pistis]を「信仰」(foi)よりも、「同意」(adhésion)と訳したではないか」、「私が同意するキリスト教」(98)

「伝統が産み出す解釈の歴史。イエスのペルソナと人物像との私の関係は、こうして二重に媒介されている。すなわち解釈に満ちた正典テクストによってと、解釈の伝統とによってである。この伝統の文化遺産と、私の核心の深層の動機づけとの一部をなしている。この意味で、私は自分が改革派の福音的伝統に「同意している」と認めるのである。「直接的」信仰ではない。」(102)

断章０（１）

「私はキリスト教哲学者ではない。」「一方で、私は単に哲学者であり」、「そして他方で、私は哲学的表現をするキリスト教徒である」、「職業的哲学者と、哲学するキリスト教徒と区別することは、それ自体の力学、その苦悩、その小さな幸福をもつ分裂症的な情況を引き受けることである。」(103)

断章０（２）

「キリストなイエスの人物像に対する私の内省的な同意の関係」、「供犠理論に、私は信仰の知性の最悪の用法を見る」(105)

「私は聖書外の伝統の中に、別の仕方で語る勇気を探し求めよう。」(106)

（３）リクールと自己論の意義

１．リクール「日本語版への序文」(『他者のような自己自身』法政大学出版局)。

「その講義は、私にとり、何十年にもわたる議論の後に、主体の問題についての私の立場を定める機会でありました。その議論をしるしづけるものは、私がフランス反省哲学、実存主義、人格主義、マルクス主義、諸構造主義などに次々と出会ったことであります。建設的な仕事をするいかなる試みにも先立って、私にとって必要と思われたのは、この問題がデカルト的コギトに集中する論争によって導き入れられた袋小路から脱出することでした」(ix)、「主体はみずからにとって透明でないことを認め、また外部の思考という言葉で私が呼ぶことになる一連の迂回路を通った後に、主体が自己認識することを認める哲学的探求に適合すると、私には思えました」(x)、「誰が語るか、誰が行動するか、誰が物語るか、誰が道徳的責任を帰属されるのか」(xi)。

→ テキスト・読解を介した自己への回帰。フロイトよりもさらにユング的に。
自我と自己、自己同一性・人格的自己（自同性-idem と自己性-ipse の弁証法）と物語的自己。

２．芦名定道「Ｈ・リチャード・ニーバーと信仰論の射程」
(『人文研究』大阪市立大学文学部紀要、第45巻第3分冊、1993年、107-126頁)

「リクール自身が自分の思想の基調、一貫性を常に意識してきたは疑問であるが（リクール[1981:2]が、最近の著作においていよいよ顕わになってきたように、リクールの思想発展の基調に「自己」の問題を確認することはリクール解釈にとって重要な意味を持つであろう。これは、『他者のような自己自身』において、初期の思想との連関が明確に議論されている点に現れている（[1990:114f.]）。(242頁、注10)

（4）テキスト解釈学と三重のミメーシス

・芦名定道「宗教的認識と新しい存在」『哲学研究』第 559 号、京都哲学会　1993 年。
　　「キリスト教信仰と宗教言語」『哲学研究』第 568 号、京都哲学会 1999 年。

・Paul Ricoeur, *Temps et Récit 1, 2, 3* , 1983-85. （『時間と物語　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』新曜社）

A．三重のミメーシス：解釈学的プロセスの三つのステップ

３．宗教的テキストの解釈学的プロセスのモデル：三重のミメーシス

リクールのテキスト解釈学の議論を基礎にして、それにブルトマン、イーザー、ペリンらの議論を組み合わせる。

具体例：「善きサマリア人」の譬え（ルカ１０：２５－３７／２５－３０ａ＋３０ｂ－３５＋３６－３７）。

25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。

30 イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」

37 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

B．ミメーシス１

４．理解の前提となる「先行理解」（Vorverständnis）の段階。

ブルトマン：「すべての解釈は、問題にされ、あるいは問われている事柄についての一定の先行理解によって必然的に支えられている」

我々は白紙の状態でテキストに向かうのではなく、常に一定の視点から（解釈の視野）、一定の問題意識に従って、一定の期待を持って、テキストに接近する。理解という作業が可能になるには、読解行為に先立つ先行理解つまり先入観を持っていなければならない。

↓

暗黙的な世界理解＋自己理解（→古い自己・古い存在、自己の自明性）

この段階でのテキストの読解は「素朴な読解」（＝第一の素朴さ）であり、世界内存在の存在様式にその基盤を有している（Heidegger の Als-Struktur）。

５．テキストの読解･理解／

「話者－聴衆」の状況（例えばイエスが聴衆に対して譬えを語る場合）

話者と聴衆の間の共通の実在（世界･自己）についての先行理解（→言葉の出来事１）

６．テキストの読解：

・作品作成：物語の筋・プロットの作成が行動という実践的世界についての先行理解に基づいていること（アリストテレス、行為の再現としての悲劇)。

・最初の聴衆・読者の読解行為：

・研究者：解釈者は作品作成の先行理解について十分に了解していることが要求される。つまり、解釈者の先行理解と作品作成の先行理解との差異性と関連性の理解。テキストの歴史批判の問題。

↓

プロットは著者とそして著者と同時代の読者とに共通の実践的世界の先行理解に基づいており、現代の読者がテキストを媒介とし作品の形成とその思想を理解しようとする場合、この二つの先行理解最低の関連づけが必要になる。

７．テキスト･作品における先行理解＝ミメーシス１。

実践的世界の了解（世界内存在の理解構造）を構成する概念のネットワーク、象徴体系、時間性の三つ。

第一の概念のネットワーク：ある行動を有意味なものとして理解するのに必要な、「なにが」「なぜ」「どのようにして」「誰と」「誰に対して」といった一連の問いによって表現される諸概念のネットワーク。

→これらの問いとそれらへの答えに従って分類され相互に連関づけられる諸概念（行動の主体、目的、手段、状況、救助、敵対、争い、成功、失敗など→グレマスの行為体分析）についての実践的理解（具体的な行動に即してこれらの諸概念を駆使できること）を有することは、行動一般をその特性に従って確認する能力に他ならない。

＝物語作成の範列的次元（ordre paradigmatique）を構成し、その解明は行動の意味論の問題となる。この範列的次元を基礎にして、諸要素が連辞的に展開されること（ordre syntagmatique ）によって個々の具体的な物語が成立する。

８．ミメーシス１：範列と連辞との二つの軸によって構造化されており、その具体的形態は文化的伝統によって規定されるのである。

↓

イーザーの「テキストのレパートリー」(Textreperotoire)。

作品の場面形成に必要な素材、テキストの構成に取り込まれた既存の知識である。

先行するテキスト（例えば新約に対する旧約)、社会的･歴史的規範（イエスが遺書史あるいは論駁したユダヤ教の規範)、テキストが生み出された社会的歴史的コンテクスト（イエス時代の制して貴兄材的な状況･出来事)、時代特有の意味システム（世界理解を可能とする一定の構造を持った現実モデル･枠組み)

テキストの文献学的歴史的研究（歴史批判）はこのレパートリー（テキストの歴史性）の解明に向けられる。

C．ミメーシス２

９.テキスト作成のミメーシス１に基づいて現実化されたテキストは、その成立の状況(「話者－聴衆」状況）から切り離され自律的な存在として固定化される（自己に対する他者)。

↓

テキストは一定の完結した形態と構造を持つものとして読者の前に存在する。

テキストの固有の形態＝ミメーシス２。

テキストはいくつかの小事件からその「主題」を問いうるような意味ある全体（Textkohärenz）として物語を構成し、多様な諸要素（ミメーシス１の範列次元にテキストのレパートリーとして用意されていた諸要素）を統合する。

10. テキストの自律性に基づく独自の客観化可能な構造。

この構造は作者の意識的意図とその無意識の作業を作用因としているが、テキストの構造は作者の作業を超えたものとして、それ以上のものがそこに見出される構造体として存在している（テキストの形相因）。

ミメーシス２はそれに先行するミメーシス１とそれに後続するミメーシス３とを媒介。

↓

ポイント：テキストの読解行為において、この独自の構造体としてのミメーシス２から読解行為のプロセスの進行にしたがってどのようにミメーシス３が生成するか。

テキストの言語的構造（文学性）についての構造分析・文学批判。

11. 読解行為の現象学（イーザー）

イーザー：読解のプロセスを導くテキストの構造上の特徴を「テキストのストラテジー」（Textstrategien）（これは作者のストラテジーとも密接に関わるがそれとはあくまで区別されねばならない）。テキストはその内部に構造化されたストラテジーにしたがって、範列的に用意されている諸要素を、テキストの主題の伝達に向けて、結合する。

不確定箇所（インガルテン）：読者のイメージ形成作業を促進させる。

12. 読者はテキストの全体を一挙に捉えることはできない（射映）。つまり、テキストは一定の順序によって読み進められることによって、徐々にその全貌を現す。cf. 絵画

↓

読解過程：主題－地平構造

読者はこの理解しようとしているものの内部で、次々に現れる様々な遠近法の視点（語り手、登場人物、虚構の読者などテキストの意味を解釈する様々な立場）を取りながら移動してゆく。読者がその都度目を向ける断片がその瞬間の主題となるが、その背後には先ほどまで向かい合っていた他の諸断片（それまで読み進んできたそれぞれの箇所）が現在の主題の理解の地平として控えている。

↓

読者が意味を了解する際の視線を調節すると同時に、テキストを遠近法の組み合わせとして統合してゆく。このは、読者の期待を呼び起こし、そしてそれを修正させ、記憶に新しい変化を引き起こしてゆく。

↓

個々の断片部分の意味内容は、この動的な主題－地平構造の内部で相互作用を行い、次第に変化し焦点が絞り込まれてゆく（断片部分の意味の明確化）。それと共に、相互作用を通して蓄積された様々な視点とその組み合わせは、読者の意識の中に次第に統一的な意味の地平（首尾一貫して意味）を形成する。

13. 形態的意味（読解には視覚的イメージに類似のイメージ構成がしばしば伴う）、イメージ形成の自己修正的な動的プロセス。 → 諸イメージの連鎖の中にあって、蓄積効果によって結合し全体の意味地平を作り出す。

テキストの間主観的構造に基づくものであり、明確な分析の対象となりうるレベルを有する（恣意的ではない）が、この構造に基づいてそこに統一的意味（一つの脈絡、一貫性）を見出すのは読者の役割である。

テキストの読解のよって構成されるイメージは多様なものとなりうると同時に、テキストの構造に基づくイメージをめぐるディスカッションが可能になる。

14. イメージ形成を促進するストラテジー（コミュニケーション構造）。

「空所」（Leerstellen）：連辞と範列の二つの軸

・空所あるいは空白（連辞）：断片部分間の結合の欠如（規範や遠近法の視点が明示的な

連関なしに配置される。物語のなめらかな連続性の欠如　→　イメージの展開の期待が破られる）→　読者に空所を想像力によって補いたい気にさせる（「主人公はここでこのように考えたに違いない」などなど)、空所の配置が巧みであればなるほど読者は想像力をかき立てられ、また空所が多いほどそこから作り出されるイメージも多様になる　→　読者はこうしてテキスト構造（空所の配置）に導かれてイメージ形成作業を開始する（読者のテキストの意味作用への参与。意味から指示への展開の開始)。テキスト構造と解釈者のイマジネーションとの弁証法による形態的意味の形成。

・否定（範列）：主題が暗示されているが明示されていない場合、あるいは慣習的に受け容れられている社会規範が否定される場合に、それは読者のイメージ形成の手がかりとなる。否定作用は読者の想像力をかき立て、その否定を引き起こした原因の探求に向かわせる。　→　その否定された規範に対して読者自身がどのような態度をとってきたのか、読者自身の規範は何かについて、反省を促す。自己自身に対する批判的距離が可能になり、これはテキスト世界の自己化への準備となる。

15. 空所や否定を配置するストラテジー　→　イメージ連鎖の形成を促進しあるいは誘導し、それの累積効果によって、読者の意識の中に統一的な形態的意味＝テキスト世界が投影される（隠喩における第一度の指示機能の中断を媒介として第二度の指示機能の開示)。

→　成功した宗教的テキストの宗教的読解：

このプロセスは自己の意味世界の変革につながる＝言葉の出来事２。

言葉の出来事１：「話者－聴衆」状況における出来事･意味も弁証法

言葉の出来事２：「テキスト－読者」状況における構造・解釈の弁証法

１と２を媒介する解釈の伝統、解釈共同体の存在

16. イメージの感情喚起・古い自己への反省

読者がテキストの構造に導かれて主観的なイメージ形成をいわば自動的に遂行するところに、ミメーシス２から３への移行の鍵が存在する。

17. 「善きサマリア人」の譬えの場合。

1) テキストの構造：同一の小事件の反復と期待の高まり。

2) ミメーシス１の知識に基づく、テキストの逆転構造の把握と、最初の聴衆の驚きの感情の理解。上昇から下降、下降から上昇。期待、期待はずれ、共感、驚き

3) 聴衆の視点の追構成。追いはぎに襲われた人の視点からのイメージ形成

受動的にことの推移を受け入れるしかない。思いがけない仕方で助けがやってくる。

4) 読者もイメージ形成に巻き込まれる。その際に、イメージ形成による感情の喚起（強盗に襲われた人、聴衆の感情の動きに共鳴・反発)が行われ、このときイエスの譬えは読者へ感性に語りかける神の言葉となる。

5) もしイエスの譬えが神の国の譬えであるとするならば、この譬えテキストの読解過程においてイメージ化された現実（ミメーシス２）は、ミメーシス１の基盤にある既存の現実理解に対して、新しい現実と実在（神の国）を指し示すものであり、さらに言えばこのイメージ化においてイエスとの出会い可能にするものとならねばならないし、なるはずである。

Ｄ．ミメーシス３

18. 以上の過程を経てテキストの読解行為は最終的にはテキスト世界の受容・自己化による読者の実践的領域の再編＝再形態化へいいたる（解釈学的プロセスの目標、新しい自己への転換)。

19. テキスト世界（一貫した形態的意味の世界）：テキスト構造と読者のイマジネーションとの相互作用によってテキストの前方へ＝読者へと開示される。

読者が外側から眺める対象としてではなく、読者の現実意識（現存在の在り方）へ様々な影響･フィードバックを生じる。

サマリア人＝隣人！　→　古い意味世界の歪みの自覚、自分は無罪と言えるか。

↓

テキストという他者との出会いにおいて、古い自己の在り方への反省と新しく示された現実理解を自分のものとして受容するという作業（ガダマーの地平融合）。

読者は自分自身が関与することによって形成されたイメージの世界に引き込まれ、感情を動かされ、そのイメージを自らの意味世界へと取り入れ、意味世界を再編する（テキスト世界の自己化による自己の拡張）。

20. イメージ形成と自己反省を媒介として自己自身の新しい発見。

新しい自己はテキスト読解以前の素朴は古い自己とは同一ではなく、自己批判をへて再び見出された素朴さという意味で第二の素朴さという言うもの。

現代人がテキストへの批判的態度を免れないとするならば、現代人にとって可能な進行とは、第二の素朴さにおける信仰ということになる。

21. 古い自己から新しい自己への転換

＝問いの転換

イエスの譬えにおいて神の国が到来し、悔い改めを生じるという事態（言葉の出来事）は、譬えの読解における神の国のイメージ形成とその自己化による自己変革のプロセスと理解することができる。さらに、こうして可能になる生の形態化としてのキリスト教信仰はテキストの読解に通して「キリストの形」になる、キリストと同形になるプロセスと言える。

22. 問いの転換：「誰が隣人か」→「おなじようにせよ」

＜参考文献＞

Ａ．哲学

『悪のシンボリズム』渓声社、1977年。

『人間、この過ちやすきもの』以文社、1978 年。

『解釈の革新』白水社、 1978 年。

『悪の神話』渓声社、1980年。

『フロイトを読む――解釈学試論』新曜社、1982 年。

『生きた隠喩』岩波書店、1984 年。

『時間と物語』（全 3 巻）新曜社。1987 年-1990 年。

『解釈の理論』ヨルダン社、1993年。

『意志的なものと非意志的なもの』（全 3 巻）紀伊國屋書店、1993 年-1995 年。

『他者のような自己自身』法政大学出版局、1996 年。

『記憶・歴史・忘却』（上・下）新曜社、2004 年。

『承認の行程』法政大学出版局、2006 年。

『正義をこえて――公正の探求（1)』法政大学出版局、2007 年。

『レクチュール――政治的なものをめぐって』みすず書房、2009年。

『イデオロギーとユートピア』新曜社、2011年。

『道徳から応用倫理へ――公正の探求（2)』法政大学出版局、2013年刊行予定。

Ｂ．キリスト教

『隠喩論――宗教的言語の解釈学』（Ｅ・ユンゲルとの共著）ヨルダン社、1987年。

『聖書解釈学』ヨルダン社、1995年。

『物語神学へ』新教出版社、2008 年。

『死ぬまで生き生きと』新教出版社、2010年。